

事例1 小学校

小学生の生き物調査と環境教育

多摩市立連光寺小学校5年生対象, 場所:多摩森林科学園連光寺実験林 (2006~2018年)

多摩森林科学園では、多摩市立連光寺小学校の近くにある研究フィールドにおいて、同校5年の総合的な学習の時間の支援を1998年から実施している。2006年以降は環境教育研究者の参画によって、それまでのフィールド提供からプログラム開発・実践へと連携を拡大した。2006年度の試行を経て、2007年度からは、年間複数回の森林体験活動を実施しており、年間8回(9日間)実施した年度もある。年度によって、実施した回数や内容が異なるが、全体の枠組みとしては、導入のための体験を行う「森へようこそ」、生き物調査を行う「森を知る」、資源利用の体験を行う「竹伐り・炭焼き」で1年間を構成する形が定着している。ここでは、これまでの実践から各部分の様子を紹介する。

1. 森へようこそ(4月, 1回)

学校から徒歩5分ほどのフィールドを訪れた5年生は、普段は入れない森林の様子に、不安や興味を隠せない様子である。挨拶や場所の紹介に続き、「今日は特別に森の案内人に来ていただきました。」というかけ声とともに、6年生が現れる。昨年度1年間の森林体験活動をしてきた子どもたちである。

6年生は、初めて訪れる5年生をどう案内したら、興味関心を持つだろうか、事前に相談して5年生を案内する計画をたててきたのである。6年生は、5年生とグループを組んで、時間いっぱいフィールドを案内する。自分たちが昨年体験したことを思い出しながら、興味を持たせるように、教えすぎないように工夫しながらの案内である。

2. 森を知る(5~11月, 3~5回)

フィールドに生息するさまざまな生き物を対象に、調査を行っていく。各個人の興味関心に基づいて個人テーマを決め、何を対象にどんなことを調べていくのかを考え、調べるための方法や道具を工夫しながら生き物調査を進めていく。植物、昆虫、ほにゅう類、両生類、鳥類といったグループと一緒に活動するが、各グループにつく指導者は、担任他の教員だけでは不足するため、外部者の支援が欠かせない。対象の生き物に詳しい専門家が担当できると効果的である。

グループ内での情報交換はもちろん、異なる生き物を対象にしている別のグループ員との情報交換も有意義であり、年度によっては、フィールドでの活動の後に、そのための時間を設けて効果をあげた。一連の活動の後には、調べた結果をまとめて、学年発表会で発表する。

事例1

3. 竹伐り・炭焼き(12～2月, 2回)

竹伐りは12月, 炭焼きは1～2月に行う。子どもたち自らの手でタケを伐採し, 炭を焼くのは, さまざまな生き物たちの住処である森林を, 人間にとっての資源としてとらえなおす意味を持つ。

竹伐りは, 従来はフィールド内にある竹林で行ってきたが, 連年の伐採で必要な量が確保できなくなったため, 現在は別の場所で行うようになった経緯がある。このこと自体が, 資源の持続的な利用の難しさを学ぶ教材でもある。竹伐りは, 単にタケを伐採するだけでなく, 炭焼きの炭材として使うために, 切ったり, 割ったりして所要のサイズに整え, 節を除去して集積する。

炭焼きは, 地面を掘って窯をつくる伏せ焼きによって, 2日ばかりで行う。窯を掘り, 炭材を入れ, 落ち葉をかぶせ, 土で覆い, 着火するまでで, 1日目の午前が終わる。昼から午後にかけて, 窯に火がまわり, 煙突から出る煙が白から透明な青に変化するのを待って, 焚き口をふさぎ, 煙突を引き抜いて, 土で窯をふさぎ, 1日目の夕方となる。

2日目は, 窯をあけて, 焼けた竹炭を取り出す。形の整った炭がたくさん出てくることもあれば, 多くが灰になってしまっている場合もある。

林間広場の地面を掘るところから始めるので, 作業が遅れ, 着火や窯閉めが遅れたことも少なくない。大人が事前に窯を掘ってしまった年もあるが, やはり最初から最後まで子どもの手で行うことが大切だと, 元のやり方に戻した。

1日目には, 窯に火がまわってしまうと, しばらくの間はすることがない。この時間を活かした森林教室として, ひとつは, 春からの活動全体をふりかえって森林の生き物たちのつながりから森林と人間とのつながりまでを考えるもの, もうひとつは, 林業の内容や意義を考えるものである。その他, たき火を使つての花炭づくりと焼き芋も行うが, これも森林からの恩恵の体験でもある。

ポイント

1年間を通して繰り返して活動することの意義として, 季節の変化を追えることや, 環境や体験に慣れていけることが挙げられる。長年にわたって継続して活動することの意義としては, 担任となる教員が毎年変わっていく中で, 長年にわたる継続によって, 経験者が再び担任になる例があることが挙げられる。経験者が再び担任になることは, 前回の成果や反省を生かすことができるだけでなく, 一緒に担任を務める活動に初めて関わる教員を支えていくことにもつながる。児童にとっても, 家庭では兄弟から, 学校では先輩から活動の話を目にして, 5年生になったら自分も参加するのだと楽しみにする雰囲気醸成される効果がある。一方で, 年間スケジュールの調整や, 学校内外の連携の調整などが難しい点もある。

(大石 康彦)